

平成23年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ホッケ

学名 *Pleurogrammus azonus*

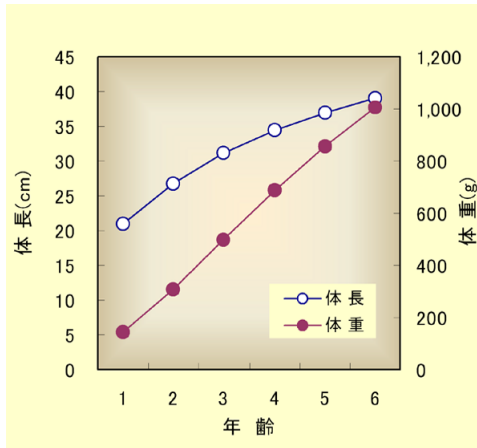
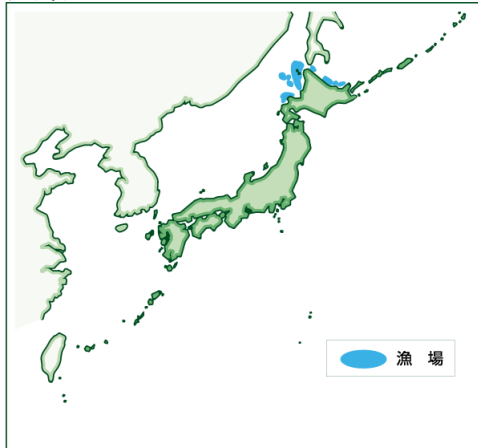
系群名 道北系群

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 8～9歳
成熟開始年齢: 1歳の終わり(一部)、2歳の終わり(大部分)
産卵期・産卵場: 9月中旬～11月上旬、利尻・礼文島の沿岸および武蔵堆の最浅部
索餌期・索餌場: 稚魚・幼魚期に主としてオホーツク海の表層、着底後に大部分は日本海へ移動
食性: 仔魚期には主にカイアシ類、未成魚期にはヨコエビ類を多く捕食、岩礁周辺で定着生活に移行後は、様々な種類の動物を捕食
捕食者: 不明

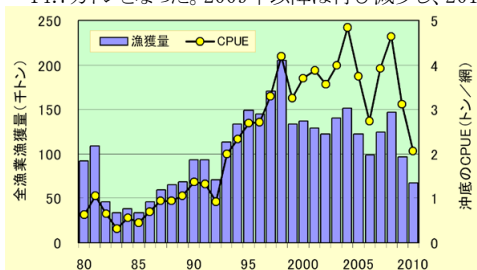


漁業の特徴

ホッケ道北系群は、沖合底びき網(沖底)、刺し網、底建網、サケ定置網などによって漁獲される。漁業種類によって主漁場および漁期は異なる。漁獲量の6割程度を日本海における沖底が占めており、日本海の沿岸漁業およびオホーツク海における沖底が1～3割を占めている。

漁獲の動向

ホッケ道北系群の漁獲量は、1980年代後半以降増加傾向にあり、1998年に20万トンを超えたが、2000～2005年は12万～15万トンで推移していた。2006年に10万トン以下に低下したが、2007年以降は再び増加し、2008年には14.7万トンとなった。2009年以降は再び減少し、2010年は前年比31%減、一昨年比55%減の6.7万トンとなった。



資源評価法

沖底では1990年代半ばに漁具能率が向上したことから、長期的な沖底のCPUEを用いた資源量推定では、資源量を過大評価する可能性がある。そこで、過去31年間(1980～2010年)の漁獲量推移から資源水準を、漁具能率が比較的安定していると考えられる過去5年間(2006～2010年)の沖底CPUEおよび漁獲量の推移から、資源の動向を判断した。なお、漁獲量と沖底CPUEの変化に加えて、調査船トロール調査、定置網および底建網のCPUEと、沖底、定置網および調査船調査により得られた1歳魚以上の体長変化とを評価の参考とした。

資源状態

本海域における過去31年間の漁獲量の平均値を50とし、35未満を低位、35以上65未満を中位、65以上を高位と設定した。2010年の漁獲量は6.7万トンで32であり、資源水準は低位と判断した。過去5年間の沖底CPUEおよび漁獲量は2008年から大きく減少し、過去20年で最低の値となっているため、資源動向は減少と判断した。調査船トロール調査のCPUEは減少傾向が見られ、1歳魚以上の平均体長は大型化する傾向が見られている。トロール調査のCPUEと体長には負の相関が見られ、近年の体長の大型化は資源量密度が減少したことによる可能性がある。



管理方策

漁獲量の変動が資源動向を反映すると仮定し、過去31年間の漁獲量の平均値から資源水準を判断すると、1990年代後半から2004年までの大半が高位水準である。2008年には高位水準となったが、2010年には低位水準に移行した。トロール調査のCPUEは両海域で減少しており、年齢別漁獲尾数から2009年級と2010年級の加入量の低さが指摘されているため、今後資源状況が悪化する可能性がある。ABClimitは、過去2年間の平均漁獲量(Cave2-yr)に0.4を乗じた漁獲量とし、ABCTargetは0.4Cave2-yrに不確実性を考慮した安全率0.8を乗じた漁獲量とした。

	2012年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	33千トン	0.4Cave2-yr	—	—
ABCTarget	26千トン	0.8・0.4Cave2-yr	—	—

- 2008年の高水準から2年連続で大きく減少したため、係数を0.4まで低下させた

資源評価のまとめ

- 当該海域における過去31年間(1980～2010年)の漁獲量から資源水準を、過去5年間(2006～2010年)の沖底CPUEの傾向から資源動向を判断した
- 調査船トロール調査のCPUE、定置網および底建網の漁労体あたりの漁獲量、1歳魚以上の平均体長の動向も判断の参考とした
- 資源は低位水準、動向は減少

管理方策のまとめ

- 2009年級および2010年級豊度は低いと考えられ、今後も資源状況は悪化する可能性がある
- 2011年級の若齢魚を獲り控え、産卵親魚群として活用することが非常に重要である

執筆者: 森田晶子・福若雅章

資源評価は毎年更新されます。